美　術　科

髙　嶋　裕　也

Ⅰ　研究主題と美術科

１．研究主題のとらえ方―教科の「目指す生徒像」

美術科では、研究主題を踏まえ、本教科で目指す生徒像を次のように考え、３年次の実践に取り組んできた。

【美術科の目指す生徒像】

創造活動の喜びを味わい、造形的視点を持って豊かに自己実現していこうとする生徒

美術科は、学習指導要領に示された〔共通事項〕を視点にしつつ、〔Ａ表現〕及び〔Ｂ鑑賞〕の幅広い活動を通して、造形的な見方・考え方をはたらかせ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を育成することを目標とした教科である。本校ではその具現化のために、色や形、光などといった、生徒を取り巻く様々な視覚情報を造形的な視点で捉え、発想・構想に結び付けたり、新たな考えを自分なりの表現として生み出したりできる学習活動を目指してきた。自分の感覚や考えを表出する際には、漠然としたイメージを言語化することが重要だと捉え、言語活動や、効果的な振り返りを工夫することで、より明確なイメージや計画を持って課題を解決し、豊かに自己実現していくことができるものと考える。

【３年間で目指す具体的な生徒の姿】

重視して育てる資質・能力	教科で育てる資質・能力	手立て
よりよいものを求める探究心や自主性、社会性	・形や色によるコミュニケーションを通して、生活や社会と主体的に関わろうとする力や態度	・〔Ａ表現〕と〔Ｂ鑑賞〕の学習内容を相互に関連付け、それぞれの学びを引き出す課題設定と題材構成
知識や技能、経験の生かし所を見いだす力	・造形的な視点で対象をとらえ、よさや美しさ、表現の工夫などについて考え、豊かに発想したり、見方や感じ方を深め、味わったりする力	・〔共通事項〕の視点で対象・事象をとらえる場の工夫 ・イメージを言語化・具体化しながら、発想、制作、鑑賞する場の工夫
場に応じて判断基準をつくる力	・感性や造形感覚を働かせて材料や用具を生かし、表現方法などを工夫して創造的に表す力	・技能や感覚を駆使して試行錯誤、創意工夫する場の設定 ・作りながら見方や感じ方を広げたり、自己の考えを深めたりする場の工夫
学びを評価し、課題を見付ける力	・対象や事象をとらえる造形的な視点について実感として理解し、感性を働かせて創意工夫していこうとする力	・毎時間や学習の区切りでの言語的、視覚的な学びの振り返りの工夫 ・授業での学習の成果を相互に鑑賞する「鑑賞会」の工夫

２．研究のあゆみ

美術科では、２年次の研究として、生徒がこれまで以上に学んだことの価値や意味を実感し、よりよいものを求めて授業や生活の中で意欲的にそれらを転移・活用していくことが意識できるような授業を目指すこととした。そのために、時代の変化に合った機器を活用した新たな題材を用いたり、従来使われてきた題材を分析し直したりして、発想や構想、技能、鑑賞に関わる資質・能力を育成していくことを重視して研究に取り組む。

美術科では、「よりよいものを求める姿」を以下のように捉えている。〔A表現〕の主に発想・構想に関わる場面においては、造形的な見方・考え方を働かせて、感じ取ったことや考えたこと、目的や機能などを基に、生徒が自ら表したいことを強く思い描き、発想や構想を練ろうとする姿である。主に技能に関わる場面においては、発想や構想したことなどを基に自分の表現を具現化できるように、自分の持っている力を発揮しながら表現方法を選択したり、試行錯誤したりしながら創意工夫して表現に結びつけようとする姿を想定している。また〔B鑑賞〕においては、造形的なよさや美しさ、作者の意図と表現の工夫、美と機能性の調和、生活や社会における美術のはたらき、美術文化などについて感じ取ったり考えたりして、対象の見方や感じ方を広げ、考えを深めようとする姿だと考えている。目指す生徒像にある「～造形的視点を持って豊かに自己実　現していこうとする」という部分がこれらにあたると考え、日々の授業に取り組んでいる。

ただし、見ること、考えること、表現することは、美術の活動では、とても密接に関係しており、実際はそれらを完全に分けてみとることは難しい。授業を通じて生まれた「造形的視点」を自覚させるために、３年次は育成された資質・能力を他の教科や場面でも生かし、美術による学びが一層自覚できるような授業の展開と、他の教科や場面での有効活用について研究を進めていきたい。

３．教科としての振り返り

実践を通しての成果（〇）と課題（▲）は以下の通りである。

〇全校生徒対象のアンケートの結果において、「美術は豊かに生きる上で必要か」という質問に対し、２年次とほぼ同じく全体の９８％が肯定的な意見を回答している。美術科の学習活動を通して学んだことが、実際に「自分の生活を豊かにしている」という実感を持っている生徒が、全体の９０％であった。美術科で学んだものを見る際の見方や考え方を基にして、将来的にもこれからの社会で必要とされる力としての発想力や想像力の重要性に気付いている。

〇「振り返り」については、２年次は今まで以上に生徒自身の「学びの自覚」という点を重視した。また、文字による記述だけでなく、毎時間変化していく作品を画像でも記録し、蓄積していくことで、言語的かつ視覚的な「学びの自覚化」を行うことができた。今まで以上に、生徒自身が美術の授業を通した学びや自己の変容を自覚しながら学習を進めていくことができるようになり、「思考力、判断力、表現力等」の育成に効果的であった。

▲発想力や、新たなものを創造していくといった、美術の授業を通した学びが、他の授業で何かを発想するときや、自分の生活の課題解決の場面で生かすことができると感じている生徒の割合は本研究を進めてきたことで僅かな増加傾向がある。他の教科などと今以上に連携し、互いの教科の特性を生かしながら、自らの学びを主体的に他の学びに結びつけていく力や意欲をしっかりと育成していきたい。３年次研究では今以上に、学年の実態や学習段階を考慮し、計画的かつ効果的な課題設定等を考えて実践していきたい。